

<実践研究>

文学的文章の学習指導における「続き物語」の採り入れ方 —「星の花が降るころに」(光村図書・中学校第1学年)の実践から—

島田俊哉 長野県長野市立更北中学校
八木雄一郎 信州大学学術研究院教育学系

キーワード: 「続き物語」, 「書くこと」, 「読むこと」, 交流, 共有

1. はじめに

1.1 中等国語科教育の動向

中学校学習指導要領(平成29年告示)において、国語科の〔思考力・判断力・表現力等〕のうち「B書くこと」の第2学年の言語活動例に「ウ 短歌や俳句、物語を創作するなど、感じたことや想像したことを書く活動」という文言が新たに加わった。

さらに、高等学校学習指導要領(平成30年告示)における国語科の新設科目「文学国語」は「小説、随筆、詩歌、脚本等に描かれた人物の心情や情景、表現の仕方等を読み味わい評価するとともに、それらの創作に関わる能力を育成する」ことを主眼として設置されたものであり、その言語活動例として「ア 自由に発想したり評論を参考にしたりして、小説や詩歌などを創作し、批評し合う活動」「ウ 古典を題材として小説を書くなど、翻案作品を創作する活動」「エ グループで同じ題材を書き継いで一つの作品をつくるなど、共同で作品制作に取り組む活動」などが示されている¹。

このような改訂の状況から、中等教育段階においても創作的な活動の比重がこれからますます高まっていくことが、今日の国語科の動向のひとつであるといえよう。

1.2 文学的文章の学習指導における「続き物語」の導入

本稿は、第一筆者が中学校第1学年の国語科の授業において行った、「続き物語」の活動を採り入れた文学的文章の実践について報告するものである。

物語のその後を想像して続きを創作するという「続き物語」は、重視の傾向にある「創作」活動の一環として、今後さらなる注目が寄せられていくことが想定される。

授業者(=第一筆者)にとって「続き物語」とは、これまでは「書くこと」の活動例として意識してきたものであったが、種々の先行研究は、それが「読むこと」の活動や学習においても有効であることを提案している。

例えば佐藤(2004)は、「サーカスのライオン」の実践例において「読むこと」の学習過程を「表現1(個性)→理解(一般性)→表現2(個性+一般性)」と提示しており、この「表現2」が本稿における「続き物語」に該当する活動となっている²。

子どもたちに好きな動物について調べさせ、それを紹介する文章を書かせる。これが

表現1である。そして、動物物語を書こうという願いを持たせた上で、物語文「サーカスのライオン」を読ませる。これが、理解である。その後、理解した物語文の描写の仕方、比喩表現の仕方、文章構成の組み立て方をもとに自分なりの動物物語を書かせる。これが表現2である。

佐藤の実践は、物語文の描写の仕方、比喩表現の仕方、文章構成の組み立て方をもとに「続き物語」を創作させるものであり、ここからは、学習者たちに教材作品の表現の特徴を意識し、原作の続きとして違和感のないものを創作するという意識を持たせようとする授業者の意図が読み取れる。

第一筆者が今回行った実践も、この点を留意したものとなっている。例えば、作品の主題や枠組みから大きく逸脱するような展開（物語場面に急激な時間的飛躍があったり、原作に登場しない人物が出てきたりするなど）にさせないことや、文体的にも原作品からはかけはなれたものにはさせないといった一種のルールを明確に設定した上で「続き物語」の活動を行うことにした。このような条件設定が、ひいては登場人物の心情や作品の展開、あるいは表現の特徴や文体に注目しながら読み進めていこうという意識を学習者に芽生えさせることになるかと期待したためである。このような意識の中で「続き物語」が展開されたとき、それは単なる創作活動（何を書くかは学習者の自由であり、そのために時に無秩序な拡散をももたらしかねない）ではなく、「書くこと」と「読むこと」とを繋ぐ往還的な学びをもたらすものになっていくはずである。学習者が教材を精読する姿勢やテキストをより十全に読み味わう姿勢を「続き物語」の活動が喚起するような実践は如何にして可能であるか。それを検証していくことが本稿の目的である。

2. 単元構想

2.1 教材観

「星の花が降るころに」（安東みきえ作）は、2012年度から光村図書教科書（中学校第1学年）に掲載されている文学的文章である。中学生である「私」が語り手となって展開される物語は、「私」とその親友の「夏実」が「銀木屋」の木の下で変わらぬ友情を誓う回想場面から始まる。しかし、現実では両者の関係はすれ違い、会話もままならないほどになってしまい、その関係の修復も上手くいかない。そこに「戸部君」という「私」のクラスメートが加わり、「戸部君」の人知れず努力する姿を目にしたことで、「夏実」との関係に悩む「私」の心に変化が生じてくる。「戸部君」と別れた「私」はかつて友情を誓った公園に立ち寄り、そこで「夏実」との思い出の象徴であった「銀木屋」は一年中葉っぱを茂らせているのではなく、古い葉を落として新しい葉を生やすという新たな特徴を知る。「私」はお守りのように持っていた「銀木屋」の花を地面に落とし、「夏実」との関係にこだわることをやめて新たな一步を踏み出す決意をしたところで物語は終わる。人間関係に悩む「私」が既存の関係の枠から抜け出し自立をしていく過程やその萌芽を描いた、いわば思春期の心の葛藤と成長を主題とした作品である。

文学的文章の学習指導における「続き物語」の採り入れ方

「夏実」との関係が結果的に修復したのか否かや、恋愛への発展をも示唆する「戸部君」との関係がその後どうなったのかといったことについては原作中に明確に言及されることがないため、今後の展開を様々に想像しやすい構造が用意されている教材ともいえよう。すなわち「星の花が降るころに」は「続き物語」という言語活動と相性の良い教材であると評価できる³。

また、「雪が降るように音もなく落ちてくる」「毛穴という毛穴から魂がぬるぬると溶け出してしまいそうに」といった比喻表現や、冒頭が回想から始まり終盤で再び回想で登場した場所に戻ってくるといった展開、あるいは作品を通して出てくる「銀木犀」の象徴性など、文学作品を読む上で学習者に注目させたい観点が種々潜んでいる作品でもある。「続き物語」のみならず、中学1年生の生徒に対して文学的文章の読み方を学ばせていく教材として様々な活動や課題設定が考えられる作品であるといえよう。

2.2 既習事項との関わり

本単元では、既習の「花曇りの向こう」との関わりを重視している⁴。「花曇りの向こう」もまた続きを想起させやすい展開となった書き下ろし作品であり、その構成についても、「星の花が降るころに」の「銀木犀」と同様、主人公の心情の変化を示す「梅干し」が登場したり、学習者と同年齢の悩みを抱えた少年が登場したりと似通う点が多い。そこで、「花曇りの向こう」の単元でも、「梅干し」などがもつ象徴性の読解や、「僕」になりきって「野外学習当日の日記を書く」という活動を設定した後に、最終的に「続き物語」の活動を行ってきたという経過がある（図1）。

図1 「花曇りの向こう」ワークシート

2.3 単元展開（全5時）

表1 「星の花が降るころに」単元展開

◆…評価観点

活動内容	学習問題	時間
課題設定 ：作品や「続き物語」に対する意欲をもつ。◆①		1
<ul style="list-style-type: none"> ◇本文を通読し、作品のあらすじをつかむ。 ◇印象に残った表現や作品のおもしろい場面をまとめ、グループで共有する。 ◇「続き物語」のモデルを示し、作品を読む意欲・必要感をもつ。 	より良い「続き物語」を作るために必要なことを考えよう。	
課題追究 ：続き物語を作るために、場面や人物の設定の仕方、人物の思いを追究し、自分の考えをもつ。◆②③④		1
<ul style="list-style-type: none"> ◇難語句や慣用句の意味を調べ、その表現の役割を考える。(家庭学習) ◇文章の構成や主なできごとを捉える。 ◇「私」は「夏実」に対してどんな思いをもっていたのかを考える。 	構成、人物の関係を捉え、「私」の「夏実」への思いを考えよう。	
<ul style="list-style-type: none"> ◇前後の叙述や比喻表現に着目しながら、「私」の「戸部君」に対する思いを考える。 ◇「戸部君」の姿を見たことで、「夏実」の不安な気持ちが変わってきたこと、同時に「戸部君」に対する印象も変化したことを確認する。 	「戸部君」と話しながら涙がにじんできたのはなぜかを考えよう。	1
<ul style="list-style-type: none"> ◇「去年の秋」と「今」の「銀木屋」の叙述を整理する。(家庭学習) ◇「銀木屋」が作品中に度々登場する重要なものであることを再確認する。 ◇「銀木屋」の叙述の違いから「銀木屋」が表す意味について、小グループでの交流を通して深める。 	作品において「銀木屋」がどんな意味をもつのかを考えよう。	1
課題解決 ：自分の考えを整理し「続き物語」を行い交流する。◆①		1
<ul style="list-style-type: none"> ◇「続き物語」の条件を確認する。 ◇創作理由を明確にしながら、物語の続きを作る。 ◇続き物語を発表し合い、感想を交流する。 	続『星の花が降るころに』を作り、単元を振り返ろう。	

評価規準**【関心・意欲・態度】**

①作品の主題や表現方法を意識して、作品がどう続いていくのかを考えようとしている。

【読むこと】

②作品を読んで、あらすじや構成、登場人物の関係や設定の仕方を捉えることができる。(C-ウ)

③比喻表現に着目し、文脈中の意味や効果を考えることができる。(C-ア)

④情景描写などに着目して登場人物の心情とその変化を捉え、自分の考えをもつことができる。(C-エ)

前述の教材観や既習事項との関わりをふまえて以上のような単元展開を構想した。次節

では、その実践の実際について述べていく。

3. 実践の軌跡

○第1時：「続き物語」への意欲付け

「続き物語」の活動を行う上で不可欠なのは、まずはそれを書いてみたいという学習者たちの意欲である。そして先述したように、原作品の続きに相応しく書くべきだという創作上の条件設定である。生徒たちの主体的な姿勢を喚起していくためには授業者からトップダウン的に課題を課すのではなく、まずは生徒たちに「続き物語」を書くことの必要感を持たせることを企図して、課題設定にあたる第1時を行った。

最初に本文を通読した後の感想では、「この後どうなるのか気になった」といったものをはじめ、『夏実』とは仲直りすることができるのだろうか』『戸部君』と『私』は付き合うのではないかと、という感想が大部分を占めていた。そこで「続き物語」の活動を行うことを生徒たちに知らせたところ、歓声が上がった。「続き物語」創作への意欲は既に十分高まっていたようだった。それを受け授業後半では、教師が作成・用意した既習の「花曇りの向こう」の「続き物語」を3種類例示し（表2）、どの例が「続き物語」として最もふさわしいかを検討させた。

表2 「花曇りの向こう」の「続き物語」例

続「花曇りの向こう」①

ついに今日は野外学習だ。今日はこの前の花曇りと違ってよく晴れている。昨日買った梅干しもばっちりだ。この梅干しを見ていると、今日は何とかなる、と勇気が出てきそうだ。そう、川口君にも話しかけてみよう。今日こそ誰かと一緒に話してみせる。がんばろう。

続「花曇りの向こう」②

あの日から10年が経った。あれから僕もがんばってきた。今では僕も社会人だ。アプリを作る会社を経営するまでになった。そして、磯野や中島、花沢...たくさんの仲間がいる。今日は久しぶりに磯野と野球でもしようかな。

続「花曇りの向こう」③

今日は待ちに待った野外学習！なんと天気は晴れ！超うれしい！梅干しもオッケー。俺、なんだかわくわくしてきたぞ。そうそう、川口君だっけ。今日話しかけてみよーっと。誰かと話せるようにがんばろー！

その結果、①が最も相応しいという結論に至った。他の2例がなぜ「続き物語」として相応しくないのかを考える中で、「続き物語」を行う上では「あまりに先の時間設定はできない」「作品で大事なアイテムが登場した方が良い」「登場人物の設定が崩壊してはいけない」「原作の言葉遣いに注意しなければならない」といった条件を立てるべきだという発言が得られた。

挙げられた条件をもとに、物語での中心人物である『夏実』と『私』の関係』『戸部君』と『私』の関係について考えていくこと、「作中での『銀木犀』の役割（意味）」につい

て考えていくという読解の観点が共有された。これらが生徒たちの発言からほぼ自発的に設定されていったことは本実践のひとつの成果と考えている。

なお、この段階で授業者から『星の花が降るころに』はどんな続きになるだろうか」という発問をしたところ、『戸部君』と『私』を付き合わせたい」というような「私」の恋愛関係に注目する生徒が多くいることがわかった。一方で、「銀木犀」が頻出することには気付いていながらも、その「銀木犀」が「既存の友人関係にこだわらず、自立していく『私』の成長」を象徴している（と同時に作品の主題と密接に関わる）ところまでは気が至っていない様子であった。

○第2～4時：読解の観点の追究

【「私」と「夏実」の関係に関する読解】

回想では良好であった「私」と「夏実」との関係が、今ではすれ違ってしまっているという大枠を確認した上で、それがどの描写から読み取れるかを挙げさせた。展開の進行とともに「音のないこま送りの映像を見ているように、変に長く感じられた」「私はきっとひどい顔をしている」というように「夏実」から拒絶されたことに絶望する様子を読み取り、最早「私」と「夏実」の関係は修復できない状況にあることを確認した。

そして、「私」と「夏実」との関わりの中で「銀木犀」が頻出しているという事実気付く生徒もおり、第4時での読解に繋がる動きも窺えた。

【「私」と「戸部君」の関係に関する読解】

「私」と「戸部君」の関係においては、初読の段階から恋愛要素を読み取っている生徒が多かった。一方で「私」と「戸部君」が徐々に親密な関係になっていく経過を「戸部君」が「私」に対して積極的に関わる姿勢にばかり注目して考える生徒も多く、「私」の視点に立って捉えていく必要性を感じた。そこで、「戸部君」の発話に対する「私」の思いを整理していきながら、「涙がにじんできた」理由を考えていくことにした。

その過程で、「やっぱり戸部君って、わけがわからない」という語りには、以前の「わけがわからない」に内包されていた「戸部君」への嫌悪感が排され、好意的なものへ変化したことを読み取り、その背景に「戸部君」の人知れず努力する姿から自身の執着心や弱さを恥じたことがあると気付いた。そして、こうした要素が「涙がにじんできた」要因になったと結論づけていった。

また、「戸部君」のそれぞれの発話に限らず、例えば「毛穴という毛穴から魂がぬるぬると溶け出してしまいそうに暑かった」「溶け出していた魂がもう一度引っ込み、やっと顔の輪郭がもどってきたような気がした」のように、「私」が「戸部君」と会話をする中で徐々に落ち着きを取り戻していくことを比喩的に表す表現があることに着目する姿も窺えた。

【「銀木犀」の象徴性に関する読解】

ここまでの学習を経て、当初「私」と「戸部君」の関係にばかり興味をもっていた生徒が、この物語には主軸として「私」と「夏実」の関係があることにも気付いてきた。そこで、「最後の場面の『銀木犀』は、本当に『夏実』と仲直りすることを意味するのだろうか。

文学的文章の学習指導における「続き物語」の採り入れ方

『銀木犀』の叙述から考えよう」という学習課題を立て、配布したワークシート（図2）に沿って「銀木犀」の象徴性を考えていく授業を行った。

事前に家庭学習で調査させておいた作中の「銀木犀」の描写箇所を列挙し、場面が進行するごとに「銀木犀」の描写も変化していることに着目させた。そしてそれぞれの描写から読み取れることを付箋に記入させ、ホワイトボード上で生徒たちに交流させることにした。

図2 「星の花が降るころに」ワークシート①

この交流を通して、ある班では、「一緒に銀木犀の木を見ていたのに一人で見ていたから、昔は二人をつなぐものだったけど、今はもうそうじゃなくなった」「一人の友達だけを気にせず、また気の合う友達を見つければ良いということの意味している」「私が変わりつつあることを意味している」といった意見を、「私の成長」「私と『夏実』の変化」という二つの観点でカテゴリライズした。そしてまとめとして「銀木犀は二人（私と夏実）をつなぐものだったけど、夏実と私の関係が変わって私も変わった」と記していた。

「銀木犀」の描写の変化に着目することによって、変化したのは「私」と「夏実」の関係と「銀木犀」だけでなく、「私」自身である点に気付いていく生徒たちの姿が見られた。「私」と「夏実」の関係を象徴する「銀木犀」の変化は「私」の変化により起こり、それは「私」の成長であるという読みである。

ここでは、登場人物である「私」にとっての「銀木犀」の意味と、読者にとっての「銀木犀」の役割を捉えるという読みがなされていることが分かる。単元当初から「続き物語」を書くという目的意識が明確になっていたことも、本時において「銀木犀」の役割を読み解く活動の動機付けになっていたと考えられる。生徒たちの中には「銀木犀」を視覚、嗅覚、触覚、イメージなど共通項目で比較していく読みを試みる者も見受けられるなど、結果的には作者の表現の工夫の発見にも繋がっていく学習課題であったといえよう。

○第5時：「続き物語」の創作

「続き物語」を行う上で、これまでの学習を受けて以下の①～⑤の条件を設定した。

- ①「私」を登場させる。
- ②「私」以外の人物を登場させる時は、作品に出てきた人物に限る。
- ③時間設定は「私」が中学生であること。（高校生・社会人等は×）
- ④「銀木犀」という言葉を入れる。
- ⑤元々の作品の言葉遣いや表現に注意して書く。

条件を確認した上で、A4のワークシート(図3)を配付し、30分ほど創作の時間を与えた。生徒は全員黙々と「続き物語」に取り組み、中には一枚では足りず二枚目に入る生徒も見られるなど、意欲的に活動に取り組む様子が窺えた。

生徒が創作した「続き物語」を内容毎に分類すると、『私』が前向きに生きていく』『私』

と『戸部君』の恋愛』『私』と『夏実』が仲直りする』の三種類(或いはこの三種類を複合せたもの)に概ね分類できた。以下に実際に生徒が創作した「続き物語」の例を示す(表3、表4、表5、なお作品内の下線は筆者による)。

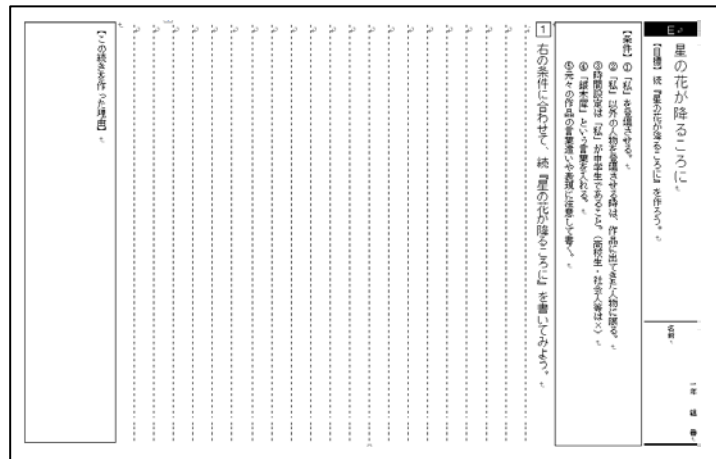


図3 「星の花が降るころに」ワークシート②

表3 「続き物語」生徒作品例①:『私』が前向きに生きていく

あの秋から夏実とは話していない。結局仲直りはできてないままだ。でも、あの日銀木屋を捨ててから気持ちも新たに、夏実への執着心もうすれてきた。なんだか物足りないような気持ちでもあるが、きっとすぐに忘れるだろう。

休み時間が終わり、男子たちのにぎやかな声がきこえてきた。戸部君だ。耳になじんだ声だからすぐわかる。いきなり「おい。」と声をかけられた。今では声をかけられるとうれしくなる。また塾のプリントを持ってきたようだ。「『胸にしまう』ってどういう意味だと思おう?わかんねんだよ。」私にもよくわからなかった。「私もわからない。調べてみたら。」と答えて会話は終わった。

家に帰ると、今日戸部君が言っていた「胸にしまう」という言葉が気になり、調べてみた。意味を知り、私はハッとした。今、夏実との思い出がいろいろあせてきていても無理に思い出さなくてもいいんだと思った。そして私は、夏実との思い出を胸にしまい、銀木屋が古い葉を落として新しい葉をつけるように、気持ちを新しくしようと決めた。そうすれば、きっとまた甘い香りの新しい花をさかせることができるだろう。

【理由】夏実と私が仲直りをしないことで、「私」が色々な成長もできるかなと思ったから。

「夏実への執着心もうすれてきた」という表現や『私』が色々な成長もできる』という創作理由から明らかなように、「私」の成長という作品の主題を理解して、「続き物語」へと反映させる態度が窺える。一方で「今では声をかけられるとうれしくなる」というように「戸部君」に対して好意的に感じる「私」も登場させている。作中の「あたかも」で作文をさせる場面や「銀木屋」の比喩表現をアレンジしながら、読解した作品を自分のものとして再創造した作例である。文章も作品と同じ常体で統一されている。

文学的文章の学習指導における「続き物語」の採り入れ方

表4 「続き物語」生徒作品例②：『私』が前向きに生きていく + 『私』と『夏実』が仲直りする

私が最後に銀木犀の木をくぐったあの日から、早くも一ヶ月が過ぎ、今はもうすっかり秋になっていた。そして私は今日、学校帰りに、久しぶりにあの銀木犀のある公園にやってきた。前にすすむ決心をした その翌日から、私は積極的に友達作りにはげみ、戸部君やクラスの女子などと、もうすっかり仲が良くなり、夏実とのことは、あまり考えないようになった。だけども——。そこまで考えていたその時、私は、反射的に木の影にかくれてしまった。銀木犀の木の前に、夏実が…一人で立っていたからだ。堂々と出ていったほうがいいのはわかっている。でも…とてもいたたまれない気分になって、やっぱり帰ろう、と夏実に背を向けた。すると…

「——ごめんね。」

夏実の声がした。ふり返ると夏実は泣いていた。

「私のへんな意地っ張りでこんなことに…。会って謝りたい。仲直りしたいよ…。」

そのしゅんかん、私の中で、プツンとはりつめていた何かがきれる音がした。

「夏実。…！私もごめんっ！ごめんなさい…。」

それからしばらく、私と夏実は話しながら泣いた。バカみたいに。大声で。

「！…また閉じこめられちゃった。」ふと、夏実が言った。二人で顔を見合わせ、笑った。

昔みたいに、雪のようにきれいな銀木犀と共に——

【理由】主人公の「私」が夏実への思いをすてきるも、心のかたすみにまだ思いが残っているなら、こうなってほしいなと思ったから。

「私」が「夏実」から自立する態度を見せながらも（「前にすすむ決心をした」「夏実とのことは、あまり考えないようになった」）、最終的には「夏実」と仲直りをするという展開となっている（「二人で顔を見合わせ、笑った」）。こちらも根底には「私」の自立を背景に据えており、作品の主題を理解した上での創作であるといえる。この作品では、「銀木犀」の比喻だけにとどまらず、ダッシュや三点リーダーの活用も見られる（「雪のようにきれいな銀木犀と共に——」など）。いささか多用しすぎていたり、一部口語になっている箇所も見られたりするが、作品の文体に注意を払って読解したことの証左と評価できるだろう。

表5 「続き物語」作品例③：『私』と『戸部君』の恋愛 + 『私』と『夏実』が仲直りする

秋、もう銀木犀も咲きはじめた。お守りをすててから1ヶ月がたった。（今年こそは香水つくろう）休み時間…「夏実…」「！なに？」「あの…今年も銀木犀をひろわない？」「！！うん！」

～土曜日～

「うわーっ！」公園は銀木犀の花でいっぱいになっていた。「これなら香水つくれるね。」

「そうだね～30分～「けっこうひろったね」「つかれた～」秋とはいえまだ少しあつい。

「夏実。木の下で休もう」「いいよ」「去年もここでこうしてたよね」「そういえばそうだね」

……

「そういえば夏実最近どう？」「ん？うーん。まあたのしいよ。そっちは？好きな人とかで

きた?」「へ?!」そのしゅんかんなぜか戸部君を思い出した。(ないないないないない!)「ま! まさか」「…顔赤いよ?」「え?!」「戸部くん?」「そそそそんなわけ…」「あ、戸部君だ。」「へ?!」「ウソだよ。」「もー!!!」私が戸部君への気持ちに気づくのはもう少しさきだと思う。
「そろそかえろっか。」「うん。また学校でも話そうね。」私と夏実は仲直りできた。また来年もさ来年も…

【理由】やっぱり夏実と仲直りしてほしいから。戸部君とがんばってほしいから。

上記のように文体がかなり口語調になり、展開に関しても唐突さが強い作品も一部において出てきたのも今回の実際である。しかしこの作品においても、単元を通しての読みの深化が反映されたものとなっている。

この「続き物語」を創作した生徒は、初読の段階から「私」と「戸部君」の恋愛を強く意識し、「続き物語」にも反映させたいという思いをもっていた(「そのしゅんかんなぜか戸部君を思い出した」)。しかし、実際には恋愛一辺倒ではなく、「夏実」との関係性にも目を向け、「続き物語」の終末は「私」との仲直りで締め括られている(「私と夏実

は仲直りできた」)。単元での学習を通して作品への認識が変容した例といえる。

そして、生徒が創作した「続き物語」の傾向は概ね表6のようになった。

表6 「続き物語」の内容傾向

内容	割合	創作理由の例
「私」が前向きに生きていく	3割	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>変わった「私」</u>のことを書いてみたかった。 ・ 「夏実」と「私」が仲直りしないことで <u>「私」が色々な成長もできるかな</u>と思った。
「私」と「戸部君」の恋愛	2割	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「戸部君」と私の関係が気になったから。 ・ <u>私を前向きにさせてくれた「戸部君」</u>にも良い雰囲気できてほしかったから。
「私」と「夏実」が仲直りする	5割	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「夏実」への思いを捨て去っても、やっぱり「夏実」と仲直りさせてハッピーエンドにしたかった。 ・ ギクシャクしたままではすっきりしない。

当初は「戸部君」との恋愛関係にばかり注目していた生徒が多かったが、最終的な「続き物語」には「私」が自立し成長した様子を書いたもの、「夏実」との関係に注目したものが少なからず見られるようになった。また、「銀木犀」を登場人物たちが出会う場として設定したり、「銀木犀から甘い香りがしてきた」「銀木犀が古い葉を落として新しい葉をつけるように、気持ちを新しくしよう」と書いたりしているように、第4時で学習した「銀木犀」の表現効果を活かそうとする「続き物語」も見られた。

一方で、文体を崩して書いてしまうものや「戸部君」との関係に終始したままのものも複数見られた。しかし、前掲の表の傍線に表れているように、創作した理由と合わせてそれらを見ていくと、たとえ主題に即した内容を「続き物語」のそれとして選んできていないものの中にも、実はしっかりと主題を理解しているものが多いことがわかる。このよう

文学的文章の学習指導における「続き物語」の採り入れ方

な例からは「続き物語」の内容と主題理解の間には必ずしも直結しないこと、あるいは生徒たちがしばしばその主題理解を何らかの意図をもって屈折・変形させながら「続き物語」を創作してくるという実際も明らかになり、それを今回の単元を通して知ることができた⁵。

4. 本実践を通しての省察

4.1 成果と展望

文学的文章の読解を主眼とした本単元において「続き物語」を設定することは、作品を読む上での課題が生徒たちの言葉から生まれ、主体的に作品に向き合おうという意識を喚起する契機となることが、本実践を通して示唆されたと言えるだろう。

また、「続き物語」それ自体が、生徒たちの読みの変容を刺激する要因として大きく寄与することも分かった。第1時の時点で恋愛要素ばかりに着目していた生徒が、第2～4時までの読解を通して初発とは異なる観点からの読みに触れることになり、結果的に第5時では多くの生徒が「夏実」との関係性を意識した内容を盛り込むようになったのは、その証左と言えよう。

本実践においては、原作と「続き物語」を接続させる上で文体や表現技法も意識させたが、このことは文学的文章の表現技法の理解度を判断するための指標にもなりえるし、学習者が作り上げた成果物に対する評価の観点を定める上でも意味のある意識づけだったと考えられる。学習活動としての「続き物語」の利点を有効に活用するためには、やはりある程度の条件設定が不可欠で、その条件の内容も生徒たちの既習の事項・内容とスムーズに接続するように留意していく必要がある。

4.2 今後の課題

今回の「続き物語」においては、生徒の作品群の多くが、文体を意識するところまでは至っていなかったことが挙げられる。第2～4時の中で、人物の心情を表す比喻表現については確認してきた。しかし、その表現技法を自分の言葉として使いこなすには、毎時のまとめで作品の表現技法を確実に押さえ、実際にその表現を用いて作文をさせるといった課題を継続的に実施していかなければなかなか定着していかないのではないと思われる。

「続き物語」として生徒たちが創作した作品を授業者としてどのように評価するのかについても課題は残る。前述したように、主題との関連性を続編としての整合性を評価する観点に組み込むのであれば、「続き物語」の内容と作品の主題を関連させていく手立てを用意しなければならない。ただし、あまりに主題を意識した発問・条件付けを行ってしまうと、自由な創作活動という「続き物語」の最大の魅力を損ねてしまうおそれがある。

また、続きを想起させるような作品は、続きを書かないこと自体に価値があるということも否めない。いたずらに「続き物語」をするのではなく、あえて結末の続きを想起させるように書くことの良さを考える、というような批評的な活動を行うこともより豊かに作品を捉える言語活動として有効なものとして考えられる。

注

- 1 文部科学省（2018）「高等学校学習指導要領解説 国語編」p.9,
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073_02.pdf
- 2 佐藤明宏（2004）『自己表現を目指す国語学力の向上策』明治図書出版，p.27
- 3 ちなみに同教科書の「学習指導書」においても、「星の花が降るころに」の単元終末における活動例として「続き物語」が紹介されている。本作品が同教科書のための書下ろし作品であることを鑑みると、「続き物語」が書かれることを想定して執筆・編集された作品であるとも推察できる。
- 4 『花曇りの向こう』（瀬尾まいこ作）は、1学期に学習した文学的文章である。『星の花が降るころに』と同様、主人公の友人関係を題材にし、年齢や時間設定も入学したての中学1年生という設定にしているなど、生徒たちにとって共感しやすい内容となっている。
- 5 「銀木犀」の花言葉は「初恋」であり、「戸部君」との関わりが「私」が成長する契機となったことを鑑みると、主題に「私」と「戸部君」の恋愛が全く含まれないかと問われると否定しがたい。それ故に「続き物語」を書いた学習者の背景にある創作理由を吟味することは非常に重要である。また、「銀木犀」の花言葉については、安東みきえ「大丈夫、きっとなんとかやっつけていける」（http://www.mitsumura-tosho.co.jp/material/pdf/kyokasyo/chugaku/kokugo/1nen/kouhoushi_c6403_1.pdf）において言及されている。

参考文献

- 寺井正憲編（2016）『学習プロセスがよくわかる！深い学びを実現する書き換え学習の授業づくり』明治図書
- 府川源一郎・高木まさき編著（2004）『認識力を育てる「書き換え」学習 中学校・高校編』東洋館出版社
- 八木雄一郎（2016）『「続き物語」の交流がもたらす文学的文章の読みの変容—『星の花が降るころに』を素材として—』『信大国語教育』Vol.26, pp.(39)-(52)

(2019年 1月30日 受付)
(2019年 3月19日 受理)